



いっしょに歩こう！ プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援

News Letter

第17号

2013年2月1日発行



▲ 新地町 年末に手作りソバ



▲ 泉玉露仮設の獅子舞



▲ 新地ベースのクリスマスツリー

2013年に寄せて

天の神様。新しい年を迎えることができましたことを感謝いたします。
これからの1年がどんな年になるか判りませんが、どうぞあなたが望むこの世界
を作るための器として私たちを用いてください。また、すべて重荷を負っている
方々をあなたの慰めと励ましの御手で包み笑顔で満ち溢れさせてください。

救い主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

司祭 影山博美 (いっしょに歩こう！プロジェクト運営委員)



▲ 釜石市 仮設で餅つき



▲ 釜石市 なでしこ割烹着合唱団



▲ いわき市内の仮設に「富岡」の想い

外国人と共に今まで

日本で被災し生活が続ける方々との歩みをご紹介します

まちの工房まどか 最後の納品

1年間の商品買い上げ支援がついに終了しました

ギアチェンジの前に “東北”を見つめる

✎ 主教 加藤博道 「3月11日から、東北から見直す日本」

3月11日から、 東北から見直す日本

主教 ヨハネ 加藤博道 いっしょに歩こう!プロジェクト本部長／東北教区主教

➤ 東北の地—厳しい風土と歴史

東北新幹線の新青森駅が2010年に出来る前までは、冬に青森駅に降り立つと、駅舎が屋根まで雪に覆われ、海からの冷たく強い風が頬にささって、どうしても石川さゆりの大ヒット曲「津軽海峡・冬景色」が口をついてでてきました。

「上野発の夜行列車降りたときから
青森駅は雪の中、
北へ帰る人の群れはだれも無口で
海鳴りだけを聞いている」

本当に北国の厳しい情景が伝わってくる歌です。ただ、歌っている石川さゆり自身は九州・熊本の出身です。全般的に言ってアイドルや人気歌手は南が多いと感じます。今は変わってきたのでしょうか、かつての東北出身の歌手は、吉幾三の「俺ら東京さ行くだ」等、最初は東北弁の訛りや貧しさをむしろ売りにしていたように感じます。開放的、現代的で明るいもの、力のあるものは南から、あるいは西から来る、という印象があります。そして「北へ帰る」という言葉にはどこか悲しみがあります。「北帰行」という歌もあります。「窓は夜露に濡れて、都すでに遠のく・・・」。

「津軽海峡・冬景色」の主人公は連絡船に乗るのですから北海道に帰るようですが、しかし北海道にはまた違う開放的な印象があります。今回の支援活動で東北に来てくださっている方々の中にも、北海道には何度も行っているけど、東北は初めてという方が少なくないようです。飛行機で上を通り越していましたと。

1896年(明治29年)、岩手県を中心に大被害をもたらした三陸大津波の際に被災地の様子を伝えた報道の中には、一ここに書くことを憚るような一ひどい差別的な発言が見られます。東北の貧しさ、言葉、迷信深さ等に対するものです(河西英通著『東北一つくられた異境』中公新書)。もちろんそれに比べると今回の状況はまったく違いますし、時代は変わっているとは思いますが。しかしそれでも、かつては深刻な飢饉、凶作に苦しんだ歴史を持ち、集団就職や出稼ぎを多く送りだしてきた東北であり、今日でも若者の就業率の低さ(仕事がないこと)、最近でこそ取り組みの成果が表れているものの、秋田

県や岩手県が自死者の率で全国一高い数字であったことは、受けとめておく必要があると思います。

そういう東北の地で起こった大震災であり、今の状況であり、そこに対する支援活動であるということ、わたしは当初からかなり意識していました。もっとも東北と一言で言っても大変に広く、地域によって人によって歴史も経験も感情も大変異なっています。釜石やいわきと津軽はずいぶんと違うでしょう。福島県と言っても、「浜通り」(海側)と「中通り」、そして会津若松のような内陸部ではずいぶん気質も異なります。そしてもちろん各地に、その地の風土、文化への高い誇りと、厳しい寒さに立ち向かってきた毅然とした生き方があります。

わたし自身は、南国・四国の松山生まれで50年間を東京で過ごし、東北教区の主教になりました。「東北」を語る資格はないと思います。しかしそれでも実は母方の背景は宮城県鳴子のこけし職人で、東北との遠い縁もあることとなります。実は自分の先祖も東北から、という方は結構多いのではないのでしょうか？

➤ この地から「巻き返す」

この大震災を機に、わたしたちの生き方、暮らしのあり方を、東北から、さらに普遍化して言えば「農」や「土」、地方性から見直そうという動きが出てきたように思います。エネルギー、原発の問題もそうです。東北の大きな書店には「東北学」のコーナーがあり、大震災から、東北から、日本を見直そうというような本が少なからず出ています。歴史的には縄文的な背景や日本近代化の中での東北の位置、また東北の民話や祭り、風俗の研究も含まれています(東北芸術工科大学・東北文化研究センターを拠点とした東北学等。赤坂憲雄著「3・11から考える『この国の形』」新潮選書、等。但しわたしはこの3・11という言い方は好きではありません。例えば家族を亡くした人は、決してあの日のことを3・11とは呼ばないでしょう。記号化した表現です)。



▲仙台市／書店の
「郷土本」コーナー

また「南三陸の農家の娘」から東京で近代史の研究者になっておられた方が、震災を機会に地元に戻り、大学の特任研究員として「東北の未来に向けて」取り組みを始めておられるという新聞記事も触発されるものでした（「朝日新聞」2012年7月4日号。オピニオン）。「縮みゆくふるさと・元々ある地域の力生かした自立へ」「過疎・高齢・格差。世界の問題が凝縮。ここから巻き返す」という記事の見出しが、その内容を要約して伝えてくれています。

この大震災の痛みから、東北から日本を、私たちの文明の価値観や生き方を見直すということが本当に起こらないならば、多くの人の犠牲と涙に応えることは出来ないのだと思います。小ささや悲しみ、貧しさや切なさというものも決して軽視されない社会。しかし昨年の衆議院選挙の自民党の大勝は何を意味するのでしょうか？やはり強い経済発展、十分な電力、強い外交なののでしょうか？

わたしが最初から、あまり「パワフル」な押し寄せてくるような支援活動を望まなかった理由もそこにあります。「奥の細道」は静かに少しずつしか通れないのです。それが「いっしょに歩こう！プロジェクト」のスローガン、「困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます」という言い方の背景に、わたしにとってはなっています。

➤ 「いっしょに歩こう！」のこれから

被災地の方たちは日本聖公会の、全国からの支援に本当に感謝していると思いますし、東西南北、教区を超えた青年たち、人の出会いはやはり素晴らし

く、今までにない新しい経験をお互いにもたらしめています。東北教区の被災した教会や諸施設は全国から多大な支援、献金をいただきました。心から感謝申し上げます。

「過疎化・高齢化・貧困と格差」という問題は、東北、被災地だけでなく、今や日本全体の問題となっています。2011年3月11日の出来事から、わたしたちの生き方がどう変わっていくのか、いまだ被災状況の中にある被災地と、もうそろそろ忘れかけようとしているような日本社会の動きの間に身を置きながら、わたし自身、自分の「回心」が必要と感じています。

日本聖公会東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」は当初から2年で計画され、それは今年の5月末日までです。しかし、被災地の困難が終わり、見通しが立ったとは到底言えない現実があるのは、誰でも感じているところです。

- ・「終わることの可能な働きは何なのか」
- ・「現地の人たちに、あるいはそこにある教会や団体（他教派、一般団体、行政も含めて）に委譲していける働きは何なのか」
- ・「継続すべきものは何なのか」「どのように」

ある人が「ギアチェンジ」という表現をされましたが、2年間、日本聖公会全国の支援の中で、管区レベルの公的な取り組みとして続けてきた「いっしょに歩こう！プロジェクト」の終わり方と次の段階へのふさわしい移行について、今、真剣な話し合いが続いているところです。

どうぞお祈りください。



外国人といっしょに 歩んで来ました

外国人被災者支援のこれまでとこれから



「いっしょに歩こう！プロジェクト」は、その開始直後から「外国人被災者支援担当」を設け、外国籍被災者の支援活動に力を注いで来ました。当初は、500 km に及ぶ被災地を目の当たりにして、どのような支援活動ができるのか、途方に暮れたというのが実情でした。しかし、一つの出会いがまた別の出会いを生み、その輪が大きく広がって来ています。出会った人のほとんどが、日本人の家庭に嫁ぎ、嫁として、妻として、そして母として、地域に根ざした生活を送っている女性たちです。

支援活動をして来たというよりは、むしろ楽しいことも苦しいことも分かち合いながら「いっしょに歩いて来た」というのが実感です。いっしょに歩く過程で、彼女たちが抱える深刻な課題に直面しました。震災で愛する人を失った人、家屋を失った人、仕事を失った人、それぞれ大きな苦難を抱えています。更に、外国籍住民として生活をしていく上で、震災前からあった課題が、震災を機により顕在化したものも多々あります。

最も大きな課題の一つが、「言葉の壁」です。来日して以来、生活の中で習得した日本語だけで生活をしているため、日常的な会話は流暢でも、深い話や難しい話はできません。読み書きにも大きな困難を抱えています。この「言葉の壁」が、多くの課題、問題を生んでいます。また、彼女たちの社会的立場を弱くし、自立を阻害していることも事実です。

そこで、当プロジェクトでは、言葉の壁を乗り越え、自立への第一歩を踏み出して欲しいとの願いから、以下のようなプログラムを展開しています。

日本語教室とホームヘルパー2級講座

第1回を南三陸町で、第2回を気仙沼市で行い、第1回目の講座に参加できなかった人たちの強い要望で、昨年11月から再び南三陸町で第3回目を開始しました。3月から福祉カレッジの実技講習を受けるために、日本語の勉強を続けています。難しい専門用語に悪戦苦闘しながらも、大きな目標を持った受講生たちは、実に生き生きと学んでいます。



▲南三陸町志津川(2012年4月修了)
6名のフィリピン人女性資格取得



▲気仙沼市/8名のフィリピン人女性が
資格取得に向け日本語の勉強を終了し、
実技講習に入りました

日本語教室

～「日本語能力試験N4」の合格を目ざして～

仙台オフィスにて。キューバ、フィリピンからの女性たち22名が参加。昨年12月2日に受験、現在は2月の合格発表を待っているところです。今年1月からは、「日本語教室パート2」の開始です。「子どもとちゃんと話したい」、「漢字を勉強して仕事を見つきたい」、「新聞が読めるようになりたい」、それぞれの夢がふくらみます。これから毎月6回のコース、夢に向かって心も新たに出発です。



英語講師養成講座

英語の堪能な人が多く、母国で英語の教師をしていた人も珍しくありません。そこで、英語講師養成講座を開設し、教師養成だけでなく、教室開設のお手伝いもしています。これまで、いわき、福島、仙台、大船渡、陸前高田、石巻の各市で開催。フィリピン人、キューバ人、チリ人の計65名が参加しました。すでに、自宅や地域の公民館などで教室を開いたり、英語補助教員として児童館や小学校で教えている人もいます。

リフレッシュ・プログラム

震災から2年近くが経過しても、心に傷を抱える人が少なくありません。そこで、母語で思い切り話し合う機会を作ったり、ワークショップを開くなどして、これまで心のケアに取り組んできました。毎回の聖餐式やプログラムの中での祈りでは、それぞれ穏やかな空間に心身を委ねることができました。

大船渡市、陸前高田市、気仙沼市、仙台市、いわき市に住むフィリピン人、インドネシア人、中国人、チリ人、コロンビア人を対象に、これまで各地で3回開催しました。

▼子どもたちのためのアートセラピーも行われました！



これから…

1月26日～27日に各地からの代表者を招いて、これまで共有してきた課題をもとに、今後に向けた「政策提言」を作成する予定です。更に、外国人被災者支援に関する2年間の報告書を作成し、今後の多民族共生社会への取り組みに役立てていけると願っています。

■いわき市（福島県）／小名浜聖テモテ・ボランティアセンター 新年のご報告

2013年の幕開けは5日泉・玉露の仮設住宅での餅つき大会でした。

前日4日午後、現地に関係者が勢ぞろいして、新年とは言え複雑な思いで新年の挨拶を交わしたあと準備にかかりました。自治会役員、ボランティアグループ「ほっこり」のメンバーを中心に準備が進められました。聖テモテ・ボランティアセンターからは餅つきの臼や杵、竈一式を提供しました。これらは水戸の愛恩幼稚園より借用したものです。テントは丑寅旅団のお世話により医療生協病院よりお借りしました。そして、5日の開幕の日をむかえました。当日は雲一つない晴天に恵まれ早朝から関係者に加えて多くのボランティアが参加して2俵のお餅をつきあげました。あんこ餅、黄粉餅、お雑煮が、延べ400人ほどの参加者に振舞われました。そのほか、綿菓子、卵焼き、福引ゲームなどが支援団体より提供されました。今回は多くの地元の方による余興が賑わいを増し加えました。子供たちのチアリーダーディング、ひょっとこ踊り、太極拳の型の披露と剣舞、最後に一段と笑いを誘ったのは地元に住むケーシー高峰さんの漫談でした。

自治会の役員さんや世話役の方々からは、昨年よりもみんなが明るくなった、参加者も若い人も増えたと喜びの声が上がっていました。



▲ 大ベテランのつき手の皆さん



▲ 地元の方がひょっとこ踊りを披露

■新地町（福島県）／新地ベース「センターしんち」2012～2013

センターホールの一隅には、彩も鮮やかに大きなクリスマスツリーがあります。毎年、磯山聖ヨハネ教会で飾りつけられていたオーナメントが、今年は3つの仮設から駆けつけてくれた皆さんの手で飾りつけられました。その時から年末年始をはさんだ6日（日）顕現日聖餐式後の交流祝会のひと時まで、センタープログラムをはじめ、来訪者お一人おひとりとボランティアスタッフの動向をこのツリーは温かく見守ってくれました。

「二人だけの年末は寂しかろう」と、手作り年越しソバやお節料理を届けてくださったSさん、N夫妻。少なくとも日に2回、朝と夕に「スタッフさんとニワトリさんに」と食糧を運び続け、さり気なく歓談してお帰りになるHさん、Mさん。4人で0時のカウントダウンと年越しを共にしてくれた2人のKさん。「ハイ野菜、ハイ煮物、ハイニワトリに」と仕事のついでに立ち寄ってくださる多くの方々。その皆さんはどなたも東日本大震災でかけがえのない人々を失ったり、家屋を失ったりした地元の方々でした。

元旦からは5人のボランティアスタッフも合流し、地元ボランティアさんとサマーキャンプ想い出会、上映会、編み物教室、茶話会、巡礼、新年会、アフター5夕食会、指圧マッサージなどのプログラムで協働しました。

「センターしんち」で迎えた初めての年末年始。半年前の昨年6月のオープンだったので、何から何まですべてが新鮮で印象深く、ここでいっしょに歩いた貴重なかけがえのない1ページとなりました。



▲ 聖餐式後の交流祝会。奥にはクリスマスツリーが。



▲ 1月3日の編み物教室

■釜石市（岩手県）／釜石被災者支援センターの行く年来る年

センターも2度目の年越を迎えることができました。感謝です。私たちの年末年始の過ごし方は被災者の方々のニーズによって決まります。それは支援者側の都合による支援ではなく、被災者本位の支援を行っているとそのようになってきます。

12月から年明けまでは超の付く忙しさでした。仙台基督教会聖歌隊のクリスマスコンサートから始まり、弘前大学グラスハーブコンサート・フルートと歌のコンサートなど音楽系のスポットプログラムだけでも10回を数え、その他に子供クリスマス会を3回、餅つきを計6か所、年末お掃除隊の活動が2仮設で約50世帯。それに並行して4つの仮設でレギュラープログラムを行っていました。

去年は被災者のみなさんがどのようにお正月を迎えればよいのかわからなかったようでした。でも今年では以前の過ごし方を思い出して昔のように過ごされた方が多かったと感じています。それは家族でゆっくり過ごすお正月です。我々がそれを邪魔しないことも重要です。でもそんな中で一人寂しい思いをされている方にそっと寄り添うことが我々のお正月でした。



▲ グラスハーブコンサート



▲ 甲子B仮設での餅つき大会。
お餅の味は5種類！

■郡山市（福島県）／郡山聖ペテロ聖パウロ教会会館 落成式

震災で全壊した郡山聖ペテロ聖パウロ教会の新しい会館が完成しました。ヒノキが香る、とても温かい建物です。1月14日の落成式当日は大雪でしたが、東北・北関東教区など各地から約60名が集まりました。郡山の信徒・地域の方々と共に記念礼拝を行い、これから豊かに用いられる事を祈り、与えられた会館への感謝を捧げました。教区や教会の宣教活動の拠点としてのみならず、地域に開放された施設として、またこれからも長期に渡って続く福島の支援活動のベースとしての働きが期待されています。



▲ 聖水をまきながら出席者全員でホール内を一周

■仙台市（宮城県）／まどか 商品買い上げ支援終了

プロジェクトでは2011年の夏から、まゆだまのオーナメントやカレンダーなど、『まちの工房 まどか』（知的障がい者のための通所作業所／仙台市太白区）の商品を購入してきました。それによって支払われた代金が通所者の皆さんの工賃に反映され、同時にまどかに仕事も生み出すことができました。また、それらを受け取った国内外の方々から、まどかへのお祈り、応援のメッセージをたくさん頂きました。



▲ 寒い中、事務所まで納品に来てくださった皆さん

毎月の納品は、いつもは職員の方が来てくださいましたが、最後の納品は総勢17名の通所者の皆さんもいっしょに届けてくれました。

まどかは、津波で全壊した施設から、仮設の作業所を経て昨年6月に新しい施設に引っ越すことができました。地域の方々や遠方からのお客さまを迎える機会も増えました。このような人々とお話していると、震災の風化を感じることもあるそうです。新施設内での活動だけを見ていると、あたかも震災などなかったかのように感じてしまうのかもしれませんが、しかし、通所者の中には、震災の恐怖がいまだにぬぐえずに、さまざまな苦しみを抱えている人も少なくありません。プロジェクトの買い上げ支援は終了しますが、これからもまどかの人たちとの関わりを大切に、皆さんの思いを発信するお手伝いをしていきたいと思っています。

※今後も教会や個人としてまどかの商品を購入することは、もちろん可能です！

詳しくはプロジェクトのホームページ（右欄参照）をごらんください。

まゆだま イースターエッグのご案内



聖公会のために「まどか」の皆さんが作ってくれた、「まゆだま」の起き上がりこぼしです。現在プロジェクトの事務局では、見本を皆さんのお手元にお届けできるように手配をしています。入手方法の詳細はホームページをご覧ください。事務局（担当者：松村希）までお問い合わせください。

【ホームページ】

<http://www.nskk.org/walk/>

【事務局】

電話 022-265-5221
メール walk@nskk.org

仮設支援

- 座布団配布／小佐野仮設 (釜石市)
- お料理会／甲子 B 仮設 (釜石市)
- リース作り／大畑東仮設 (釜石市)
- 餅つき大会／大曾根仮設・甲子 B 仮設・上中島仮設・甲子第 10 仮設・昭和園仮設 (釜石市)
- ▲ 買い物バスツアー／箱塚桜団地 (名取市)
- ◆ ほっとコーナー (お茶会)、ほっとシネマ (映画会)、指圧マッサージ／広畑仮設 (新地町)
- ◆ ほっとシネマ (映画会)／雁小屋仮設 (新地町)
- ◆ カットサービス／作田仮設 (新地町)
- ◆ ほっこりカフェ、クリスマス会、餅つき大会／泉玉露仮設・渡辺町昼野仮設 (いわき市)

その他にも…歌う会、談話室プログラム、ジャガイモ配布、タオル配布、グラスハーブ演奏会、手作り靴下カバー贈呈、ボランティア慰労会、クリスマスの集い など

障がい者支援

- ▲ 商品買い上げ支援／仙台市 (まどか)
- ▲ 作業補助／気仙沼市 (ひまわり)
- ▲ クリスマス会参加、お手伝い／仙台市 (まどか)

外国人支援

- ▲ 個別支援 (子ども学習支援、刊行物の解説、職業安定所などへの付添い、他)／石巻市、多賀城市、仙台市
- ▲ 英会話教室開講支援／名取市、仙台市

- ▲ 手作りプログラム／南三陸町
- ▲ 日本語教室／仙台市
- ★ リフレッシュプログラム／盛岡市、いわき市

その他

- ▲ ナザレの家、青葉静修館などの物資整理／仙台市
- ◆ 鶏卵おすそ分け／新地町
- ★ 幼稚園行事手伝い／釜石市、会津若松市、郡山市
- ◆ 幼稚園にて相撲教室／会津若松市、郡山市

元力士が聖公会の 2 つの幼稚園を訪問。放射能の影響によりなかなか外で遊べない子どもたちと思いきり体を動かしました。昨年に続き 2 回目でした。



▲ 食品などの放射能計測依頼／仙台市

仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク(東北ヘルプ)が運営する食品放射能計測所で検査してもらうことで、外国人など自力で情報を得ることが困難な方々、食品への不安を持つ方々に寄り添っています。

- 岩手県 ▲ 宮城県 ◆ 福島県 ★ その他、複数県における活動を示します。紙面の都合上、掲載されていない活動もあります。特に 12 月は各地で共にクリスマスを祝う集いが行われました。詳細は各ベースのブログをご覧ください。

ホームページ : <http://www.nskk.org/walk/>

コラム あの日あの時、この人と。

⑥東北のお正月

東北の正月行事に、「どんと祭」があります。日本各地で類似した祭りがあり呼び方は様々ですが、小正月に正月飾りなどを神社で焼き、1 年間の無病息災を祈る行事です。

2013 年 1 月、宮城県気仙沼市のある地域で 2 年ぶりのどんと祭が行われました。津波により神社も周囲の建物も破壊され、地震により地盤が約 70cm 下がった地域で、現在でも満潮時には冠水することがあります。神社の周辺に住んでいた方々も家を失い、今は仮設住宅などでばらばらに生活されています。

しかし、やはりあの場所でまたどんと祭をやりたい、という願いから、2 年ぶりに炎が灯りました。

仙台の新聞やテレビでは、どんと祭以外にも獅子舞、大風祭りなど、道具や気持ちの問題で 1 年前にはできなかった季節の行事が少しずつ地域に戻ってきていることが紹介されています。復興なんてまだまだ遠いと感じる方が多い被災地の現状ですが、こういうことがあると前へ進んでいると感じられるね、と地元の方が話していました。地域の方々を繋ぐ大切な場が、少しでも多く取り戻せること、また、新しく作られることを願います。

(2013 年 1 月仙台圏ベース)



いっしょに歩こう! プロジェクトニュースレター第 17 号 2013 年 2 月 1 日発行
 「いっしょに歩こう! プロジェクト」事務局 **OPEN** 月～金 10:00～17:00 **CLOSE** 土・日・祝
 〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町 3-4-5 クライスビル 2F TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321
 E-mail: walk@nskk.org ホームページ: <http://www.nskk.org/walk/>